

## L. 消化器 (肝・胆道)

### 187 小さな肝癌の検出への核医学的検討

岐阜大学 放射線科

○今枝孟義 仙田宏平 加藤敏光

浅田修市 山脇義晴 土井偉誉

我々はこの11年間に慢性肝炎、肝硬変症の症例を核医学的複合検査法—コロイド肝シンチ、 $^{67}\text{Ga}$ 腫瘍シンチ、RIアンギオ、AFP、CEA、HBS 抗原・抗体など—によって追跡し、その経過観察中に肝細胞癌の発生を認め、23症例につき検討を加え、肝細胞癌の発生過程におけるコロイド肝シンチ上の肝形態、脾影および骨髄影の描出度の変化、AFP、CEA、HBS 抗原・抗体の変動を分析するとともに今迄の自験肝細胞癌143症例についてもあわせ検討を加え、今後において肝癌発生を予知し、切除可能という意味での“小さな肝癌”の発見、早期治療の可能性を追求したので報告する。

肝細胞癌の発生まで経過観察しえた23症例についてみると年齢分布は44~73才で50~60才代にピークを認めた。性別は男が20例で圧倒的に多かった。経過観察期間は1年以上で最長11年8カ月であったがほとんどの症例が3年以内であった。AFPは18例が経過につれて上昇したが5例において目立った変化を示さなかった。またAFPは3例において早期発見に役立たなく、AFPよりもコロイド肝シンチの方が肝癌の存在をより早く検出しえた。その後しばらく経ってAFPは上昇した。CEAは12例で $25\text{ ng/ml}$ 以上を示したが、経過につれて上昇したのは7例であった。

HBS抗原は8例に陽性であり、その内頸回の採血によって経過の追ってある症例を同一Kitにてその力価の変動を求めてみると1例が上昇し、1例が下降し、2例が目立った変化を示さなかった。HBS抗体は8例に陽性であり、経過につれての力価の変動は5例が変化なく、3例が下降を示した。

コロイド肝シンチ上の変化として目立つことは、肝癌検出部位が右中左葉の内、右葉に最も多く、左葉のみは2例にすぎなかった。肝癌の発生を認めるにつれて脾影が増強した症例は半数に認められた。また骨髄影は9例に増強した。

肝シンチグラムにおいてはその存在を検出しえず剖検にて初めて肝癌の存在が判明した3例においては肝シンチ上経過につれて肝右側萎縮が著明であり、AFP、HBS抗原は共に陰性であった。

以上得られた所見について肝細胞癌143例においても検討を加えた。

小さな肝癌を発見するにはコロイド肝シンチとAFPを組合せるのが最も有効な手段と思われる。びまん性肝疾患においては3カ月ほどの観察期間でこまめに追跡する必要がある。

### 188 肝癌における多核種シンチグラフィ—の意義—とくに原発性と転移性の鑑別について

弘前大学医学部第一内科

○坂田 優、石沢 誠、小松良彦

公立米内沢総合病院

富田重照

昭和46年3月より昭和51年11月までに942症例に肝シンチグラムを施行し、このうちSpace Occupying lesion (SOL)を示す限局性肝疾患201例に確定診断を得た。その内訳は原発性肝癌43例、転移性肝癌130例、その他28例であった。これらについて質的診断を試みたので、その成績を報告する。

原発性肝癌と転移性肝癌におけるSOLと脾影出現度についてみると、原発性では単発性のSOLが83%を占め、中等度以上の脾影を示すものは62%であった。転移性では多発性のSOLを示すものが60%で、脾影は92%が軽度以下であった。このことからSOLが単発性で脾影が中等度以上のものは原発性肝癌の疑われることが示唆された。さらに $^{67}\text{Ga}$ -citrateを原発性14例、転移性39例の計53例に投与してその陽性度を検討したが、原発性肝細胞癌、および転移性肝癌のうち未分化(低分化)型原発巣のものは陽性を示した。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Sn-colloid、 $^{67}\text{Ga}$ -citrateを用いた肝シンチグラムにAFPの定量を加えることにより、原発性および転移性肝癌の鑑別と組織型の推測がある程度可能であると考えられた。